平田　久美子　（大阪市立大学医学部　医学研究科　循環器病態内科学）
【留学先】Columbia University College of Physicians and Surgeons
【テーマ】ホルモン補充療法の冠循環への影響－経胸壁心エコー図を用いた検討－

【帰国報告書】

　吉川先生（大阪市立大学第一内科の前教授、現　掖済会病院院長）に、″アメション″という言葉知っとるか？ちょっとアメリカに行って、ションベン（すみません）してくるっちゅう意味や。そんな感じで、気軽に勉強して来なさい。と、言われ、笑顔でアメリカに送り出されたのは、4 年前のことでした。

2001年12月から2004年6月まで米国コロンビア大学医学部付属病院の循環器内科に留学しました。コロンビア大学付属病院は、マンハッタンの北の端、スパニッシュハーレムの中心にあり、患者の9割以上は中南米からの移民の方々でした。そのため、米国なのに英語はほとんど通じませんでした。まず覚えたのは、心エコー図検査の時に患者さんに言うための「息をすって、、、吐いて、、」のスペイン語「レスピレ　プロフンダメンテ、、」とありがとうの「グラーシャス」です。最初はかなり戸惑いましたが、2年も経つと、おじさんに対しては、シニョーレと呼びかけ、あとはジェスチャーでごまかしながら、エコーを撮ってしまうというテクニックだけ上手になっていました。

主に、3D　エコー、冠動脈エコーの研究を行いました。渡米後すぐに、本間先生(研究室のボス)から、フィリップスの3D　マシーンで研究をしてください。といわれ、しばらくすると、いきなり、箱に入った3D　エコーマシーンが部屋の前に届きました。説明書もなく、自分で機械を組み立てた経験もなかったので、びっくりして本間先生に相談すると、″自分で組み立てられないのなら、フィリップスに電話して訊いてください。″と、すげない返事をいただきました。日本は至れり尽くせりで良かったなあ、とか、アメリカは　DIY の国なんだなあ、としみじみしながら、英語で、電話で、しかも自分で組み立て、、と、暗澹たる気分になったのを思い出します。初代の3D　マシーンは、スイッチを入れても、三回に一度くらいしか、立ち上がらないし、検査中に突然、画像が消えたり、せっかく撮ったイメージを保存できなかったりしたので（これが一番辛かったです）、何度も涙が出そうになりました。その後、エコーマシーンの改善すべき点について、フィリップスの人たちと下手くそな英語で何度も話し合いました。二代目、三代目プロトタイプ3D マシーンになってくると、だんだん、それらしい3次元的な画像になってきました。正直、4 年前に初代の3D　マシーンの画面に浮かぶ灰色のうごめく物体を見て、それが心臓だとわかる人はひとりもいませんでしたし、私自身、10年以内にこの機械が市販にこぎつけることがあるのだろうか？と、大層不安に感じていました。しかし、その後1年少しで、4代目の3D エコーマシーンが商業ベースに乗りましたので、フィリップスの技術陣の能力はすごいと思います。留学期間中、ずっと3D　マシーンと一緒に過ごしてきましたので、機械が市販された時は、とてもうれしかったのを思い出します。

また、冠動脈エコーの研究もしました。同じラボに留学していたマレーシア大学の教授と一緒に、SLE 患者の冠動脈予備能（CFR）の研究をしました。コロンビアではなかなか患者が集まらなかったので、結局、マレーシアまでエコー検査に行きました。インド人の女医さんと朝から晩まで CFR の測定を行いました。今でも彼女とはいい友達です。マレーシアは、いい人ばかりで、食べ物もかなりおいしく、何度でも訪れたい素敵な国です。

コロンビアのエコー室のメンバーは、本当にいい人ばかりで、人間関係にも恵まれていたと思います。ラテン系のヒトが多く、彼女達はとても陽気で、毎朝、ハーイ、ハニーとウインクされます。わたしも、ハーイ、ハニーって、言い返さなければ、と思うのですが、恥ずかしくて、結局一度も言えませんでした。同僚の医師も、いい人ばかりで、なかに、会うたびに英単語を一つずつ教えてくれる親切なアメリカ人医師がいました。私の拙い英語の文章もびしびし添削くれますので、まるで英語の先生のようなありがたい存在でした。それに、なんといっても本間先生が大きな存在でした。いつでも親切に相談に乗ってくださり(しかも日本語で)、適切な助言を下さり、いつもみんなの将来のことを考えておられる本当に頼りになるボスでした。

留学して良かったことは、数え切れないくらいありましたが、ひとつは、日本やアメリカを含む世界の国について考える機会が多くなったことだと思います。研究室では、アメリカ人や他の国から来た研究者と話す機会が多く、様々な国民性や価値観、その歴史的背景に触れることができて、大変勉強になりました。ひとりの日本人として、世界の中の一個人として、今後、世界の人々とどのように接して行けばいいのか、また、世界の中での日本のあり方についてなど、いろいろ考えさせられることも多かったように思います。

2年半の間、本当にいろいろなことを勉強させていただきました。アメリカ留学という貴重な機会を与えてくださった吉川先生をはじめ、今までお世話になった全ての方々に、特に、貧乏な私に留学助成金をくださいましたフィリップス社様にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。本当に有難うございました。